

(課程博士・様式9)

愛知教育大学・静岡大学大学院教育学研究科

学位論文審査報告書

審査委員

審査委員長 野平 慎二

委員 村山 功

委員 中野 真志

委員 石川 恭

委員 倉本 哲男

委員 _____

委員 _____

審査期間 令和4(2022)年5月23日から令和4(2022)年7月15日

審査論文

アメリカの高等教育機関における Community Engagement Professional に関する研究 ～サービス・ラーニングの分野に焦点を当てて～

専攻 _____

氏名 馬場 洸志

生年月日 昭和60(1985)年 2月 9日

提出日 令和4(2022)年 5月 11日

本論文は、アメリカの高等教育機関における地域参加型学習に従事する専門家の職務内容調査を通し、職員や教員との違い、同専門家による教育参画（学生指導）の意義を明らかにすることを目的としたものであり、次の7章で構成されている。

序章：研究の背景と目的

第1章：地域参加型学習とそれに従事する専門家

第2章：サービス・ラーニング（SL）の理論とその教育効果

第3章：第一調査：実際の教育現場でのSLコーディネーターの職務内容

第4章：第二調査：アメリカのSLコーディネーターへのアンケート調査

終章：本研究の成果と今後の課題

補論：SLコーディネーターによる教科開発

本論文では、アメリカで先進的に取り組まれている地域参加型学習（Community Engaged Learning）の中心的な教育活動であるサービス・ラーニング（SL）と、SL科目やプログラムを運営する専門家のSLコーディネーター（以降コーディネーター）に焦点が当てられており、その専門家の職務実態が詳細に論述されている。先行研究では、コーディネーターの役割・業務が、事務的な後方支援から、SLの教育効果検証や授業補助など、教育への参画へと広がっていることが整理されている。一方で、その教育参画の実態は、文献ではその名目上の役割に留まっており、その具体的実態についての研究は極めて少ないため、本研究ではその点に着目している。

調査を進めるにあたり、著者は「第一調査（予備調査）」をもとにアメリカの大学でSLに従事するコーディネーターにインタビュー調査を実施し、質的分析を通して教育参画の具体的実態や、その専門性を明らかにしている。また、この調査を通して明らかになった残余部分調査を「第二調査」と位置づけ、教員とコーディネーターの違い、コーディネーターによる教育参画の有無が職務に対する態度に及ぼす影響を及ぼすかといった点を調査している。特に「第二調査」では、アメリカの大学でSLに従事するコーディネーターに対してアンケート調査を実施し、質的・量的に分析し、教員とコーディネーターの違い、コーディネーターによる教育参画の有意性を明らかにしている。

本研究は、コーディネーターによる具体的教育活動を明らかにし、コーディネーターによる教育参画の意義を見出している点、将来的に日本のSL及びコーディネーターの発展に寄与しうる点に大きな意義がある。また、研究の意義だけでなく、アメリカの大学へのインタビュー交渉・調整、直接現地に赴きコーディネーターからインタビュー・データを得ている点、30以上のアメリカの大学からアンケート調査データを入手している点など、国際的に研究を展開したスケールの大きさが賞賛に値する。本論内でも述べられている通り、今後追究していくべき残余課題はあるものの、コーディネーターによる「大学の教科開発」という観点は新奇性があり、今後の国内SL研究に示唆を与えるものだと言える。

よって、本教科開発学専攻の学位論文として認める。